

【議事】 定27

(1) H-IIA ロケット 10号機及び M-V ロケット 7号機の打上げについて (その1)

松尾 安全部会長が資料 27-1-1 (調査審議結果) を丁寧に説明したあと、下記のようなやり取りがあった。

井口：宇宙開発委員会は助言をする組織であるが、安全に関しては命令権を有する。この件については決議を必要とするので、審議を行う。

井口：異論がないようなので、これを承認としたい。  
(異議なし)

(1) H-IIA ロケット 10号機及び M-V ロケット 7号機の打上げについて (その2)

JAXA の河内山理事が資料 27-1-2 (H-IIA #7 と M-V #10 の打上げ期日) と資料 27-1-3 (M-V #10 の準備状況) を読み上げるように説明した。続いて資料 27-1-4 (M-V #10 の実験計画) は打上げ期日など TBD となっていたものに数値を入れたことを説明した。その後、下記のようなやり取りがあった。

井口：エンド・トゥ・エンド試験はこれからやるのか。

JAXA 森田：その通りである。

井口：エンド・トゥ・エンド試験の結果を報告してもらい、それから打ち上げの決定をすることになる。

(1) H-IIA ロケット 10号機及び M-V ロケット 7号機の打上げについて (その3)

JAXA の河内山理事が資料 27-1-5 (今後の M-V ロケット) を読み上げるように説明した後、下記のようなやり取りがあった。

井口：宇宙開発委員会では第2期長期計画を(計画部会)で検討している最中で、打上げシステムの議論もそこで行われることになっている。その中で固体の位置付けを明らかにする予定である。

青江 (計画部会長)：実施機関の意向は承った。教えてもらいたいことがある<sup>1</sup>。衛星 500 kg というのは科学目的に限るのか？

JAXA 河内山：これまでと違う意味で、活用されることが多くなる(衛星のサイズだ)と考えている。

青江：数の分析はやったのか。

JAXA 河内山：やっている。

青江：国内を対象にしたのか？

JAXA 河内山：国内を主に考え、外国の衛星についても配慮した。

青江：500 kg は初めてなのか？

---

<sup>1</sup> ご覧のようにしつこく食い下がって質問を続けた。小職は懸命に質問の意図を嗅ぎ取ろうとしたが、できなかった。河内山理事も意図が掴めなかったのであろう、後になると回答の不明確さが増している。

JAXA 河内山：初めてである。大型化の動きがないわけではないが、中小の衛星には数を増やせるという意味がある。

青江：大型化傾向から変更したというのは如何なる理由か？

JAXA 河内山：全体としての意味で変わってきており、「何をやるのか」に掛かっている。

青江：大型化については目処が立ちつつある段階だと考える。コストを考えると大中小とニーズに即したものを選べば良いのではないか。

JAXA 河内山：そういう時期ということもあるが、何をやるのが先ず有って、そこにニーズが生まれてきて、そしてサイズが決まる。

青江：ニーズというのはユーザが持っているもので、それを吸い上げていくというものではないのか。

松尾：大きくなると（資金が）そこに集中し、（衛星計画が持ち出されていないところに）ニーズを持ち出せなかったということではないのか<sup>2</sup>。

JAXA 河内山：そうである。

---

<sup>2</sup> 「最初に宇宙ありき」ではないかとの指摘を良く受ける。その真の原因を探るには、この回答が参考になるのではなかろうか。宇宙開発の初期には、ロケット技術の開発という目的が先ず有り、衛星重量の制約が決まり、その中で衛星による観測のニーズが選び出された。次の段階では衛星バス技術と主要ミッション機器技術の開発が目的に掲げられ、観測ニーズが選び出されるようになった。観測ニーズが牽引して計画が作られる段階がこの後に続くのであるが、未だそこに到達していないのかもしれない。米国のベンチャーは到達したつもりであるが。

井口：ニーズを聞き取るための小委員会を作って、そこで議論しては如何か。

松尾：ロケットを作るなどという事はめったにない訳で、コストとか意味のあるロケットにまとめる努力をお願いしたい。

井口：固体は日本独自で進めてきた訳で、（私は固体技術に取り組むことを）尊重<sup>3</sup>している。

青江：総合科学技術会議でも言及<sup>4</sup>しており、固体を尊重することは吝かでない。

JAXA 河内山：どんな物を作るのかに掛かっている訳で、精一杯努力したい。

---

<sup>3</sup> 尊重して頂けるのは有難いことであるが、「独自性」を理由に上げるのは頂けない。安易に輸入に頼れない技術なので、自ら開発を行って、身に着けるのである。固体ロケットはその典型（MTCRの輸出管理品目の塊）であるが、地球観測、通信、準天頂衛星にも、国家安全保障に関する技術開発対象部分が多く存在している。

<sup>4</sup> 「独自性」より更に劣悪な理由である。宇宙開発委員会がやるべき仕事を、内閣府に取られてしまっている。そこを先ず反省していただきたい。